校長室より

暗唱だより
令和５年７月
第三吾嬬小学校長
川中子　登志雄

兼好法師（吉田兼好）

今月は「徒然草」に挑戦！

７月になりました。寺中地区青少年育成委員会の皆さんが、今年も七夕のお飾りを飾ってくださいました。近くの三輪里稲荷の宮司さんがいらっしゃって、これはとてもいいとおっしゃっていました。ありがたいですね。さあ、夏休みまであと３週間！　蒸し暑い日が続きますが、７月も元気にがんばりましょう！

今月は日数も少ないため、少し短めの課題を選んでみました。これまでにも課題にした清少納言の『枕草子』、鴨長明の『方丈記』とならんで、日本の「３大随筆」の一つといわれる、吉田兼好の『徒然草』の出だしの一節です。

作者の吉田兼好（兼好法師）はどんな人でしょう？

> 1283 ～ 1350 ？
> 鎌倉末期・南北朝時代の随筆家・歌人
> 兼好法師ともいう。俗名卜部兼良。京都吉田神社の神官の子。北面の武士であったが出家し，晩年京都双岡に住む。二条派の頓阿と親しく，和歌四天王の一人に数えられた。歌は人事を詠んだものが多い。『徒然草』の作者として有名。
>
> （旺文社日本史事典 三訂版より）

鎌倉時代末期から南北朝時代のころというのは、日本の歴史の中でも際だった動乱の時でした。そんな時代の中で、世間の人たちから離れたところから人々や時代の様子を思いつくままに書き記したものが『徒然草』という作品になりました。

また、この出だしの部分「つれづれなるままに…」というのが、「随筆」という文学作品のジャンルの特徴をよく表していると言われていることでも有名です。

（「随筆」とは、ある題目をめぐって，親しみやすい散文で筆のおもむくままに語るという形式で書かれた文章。「エッセー」とも呼ばれる。出典　ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典）